

令和6年度 宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校（全日制）【自己評価及び学校関係者評価】

4段階評価 4：期待以上 3：ほぼ期待通り 2：やや期待を下回る 1：改善を要する 》

教育目標 1 知徳体の調和のとれた人材の育成を目指す。 2 校訓「正義」「寛容」「実行」を具現化し、21世紀を担う人材の育成を目指す。							
重点目標	評価項目	計画(Plan)	実行(Do)	評価(Check)	改善(Action)		学校関係者評価
		重点努力目標（評価指標）	方策・手立て（数値目標）	学校自己評価	総合	結果と考察・改善	評価
(1) 生徒一人一人の学力を最大限に伸ばし、現役合格にとらわれない真の進路実現	基礎・基本の定着と学力向上	① 面白くてためになると生徒が感じる探究型授業の構築と学びに向かう姿勢の確立【リサーチ・シンキング】	(ア) 基礎学力の向上（個別最適な学びの研究） 自宅学習の充実（予習・復習・課題の研究、自走化の推進、ICT活用による学習履歴の蓄積と活用、オンライン授業の研究） 探究型授業の推進（生徒自らが問い合わせる授業、課題解決型授業、教科横断的授業の研究・実践）	4	4.0	生徒の学びに向かう姿勢を高めるために、探究型授業を推進している。教科代表者を中心に各教科で授業研究を進めていただいた。探究型授業を進めためには、基礎的基本的事項の定着は必須である。定期テストに向けて、2週間前にはテスト範囲と日程を連絡し、計画的に学習を進めるよう手立てをとった。計画・実行・振り返りのサイクルを確立させ、思考するための土台を作り、3年間で自走できる生徒育成していきたい。ロイロノートなどICTを活用して生徒の質問に答えるなど、個別最適な学びのためのフォローを行っている。	4.0
		② 指導力向上への支援【リサーチ】	(ア) 3年間及び6年間を見通した探究型学習への挑戦 他の分掌との連携による研究授業・授業公開の工夫・改善 ICTの活用を含んだ授業研究と教科研修会の充実	4		SSH指定校となり、探究型授業を全校体制で進めていくため、1学期は7/5（金）～7/22（月）、2学期は10/11（金）～11/15（金）の期間中に「生徒が主体的に学ぶ『いすみ式探究型授業』への挑戦」をテーマとした研究授業・授業公開を実施した。3学期は1/20（月）～3/14（金）の期間中に相互参観キャンペーンを行い、授業力向上を図っている。	
		③ 情報発信（校内向け）・情報管理【コミュニケーション】	(ア) 附属中学校との連携 DX委員会と各校務分掌との連携・分担 学校のニーズに応じた効率的なデータ整理と校内での情報共有 校務支援システムの運用と活用による生徒情報等のデータ処理の推進	4		・We are 泉ヶ丘』の発行により、2ヶ月前に行事予定を校内や家庭に示し、学校全体が先を見据えて計画的に行動できるように情報共有を行った。また、必要な情報については、ClassiやClassroomなどを用いて全体に連絡し、ICTも有効に活用した。 校内の会議についても、可能な限りペーパーレス化を進めた。	
		④ 分掌内や関係分掌との連携【チームワーク】	(ア) 他分掌との連携・分担による働き方改革とチーム学校の強化 (イ) 附属中学校、足利市立高校との連携を深め、一つの学校としての一体的な体制構築 (ウ) 分掌内の適正な分担による個人の負担軽減	4		中学校と高校、校務分掌間、全日制と定期制間での報告・連絡・相談により、校内での分掌間の連携を徹底させ、生徒が学校生活を円滑に過ごすことができるようした。	
	進路支援の充実	① 進路意識の高揚【リサーチ・シンキング・コミュニケーション】	(ア) 進路目標の早期決定と各種模試・検定等への挑戦を支援する 職業観、人生観を構築していく過程で「探究心」・「レジリエンス」の涵養を図る キャリア教育、大学出前講座、職業講話、各種講演会等を実施する	4	2.6	進路目標の早期決定のための面談期間を設け、生徒の進路意識を把握とともに、その状況に応じて適宜助言やサポートを行った。キャリア教育推進のため8月19日（月）にキャリア教育支援センターのトータルコーディネーターである水永正憲様に全職員を対象に実施した。日常の学校活動にキャリア教育の視点を持つことと時代変革の中教員が自らが未知への挑戦していく姿勢を持つことを講演して頂いた。大学出前講座・職業講話・講演会では企業の方や大学の先生方のご協力を頂き、生徒の職業観涵養や進路意識の向上を図ることができた。	3.0
		② 進路指導計画【マネジメント・シンキング・チームワーク】	(ア) 3年間、および中高6年間を見通した進路指導計画を策定する SSH事業に伴う「探究活動」の効果的な活用を図る 「いすみGS」を意識した支援を行い、資質・能力の育成を図る 難関大学、学部を志望する生徒の支援を実践する 高大接続に伴う入試制度改革に対応した進路支援を計画・実践する	2		進路指導計画については、泉ヶ丘が伝統校として築き上げてきた取り組みにおける不易の部分は継承しつつも、SSH指定校として進化すべき点を柔軟に改善してきた。その点をふまえ新たな指導計画策定は継続すべき課題である。「探究活動」での取り組みについては、総合型・学校推薦型入試における生徒指導で活用した。難関大学を志望する生徒への支援については、各種講演会や学習会の機会を設けたり、放課後の課外授業で学習支援をしたりすることで、着実に成果に結びつけてきている。	
		③ 進路資料の収集と提供【リサーチ・シンキング・マネジメント】	(ア) テスト成績の分析・評価、授業・進路支援のサイクル改善に活かす 進路便り「汲泉」等で、役立つ進路情報を生徒・保護者に提供する	3		模試の分析方法について観点別の視点を盛り込み、授業で活かせるよう改善を図ってきた。進路情報についてはグーグルクラスマップを活用して、生徒や保護者に進路に関する情報を提供した。	
		④ 職員研修の充実【リサーチ・マネジメント】	(ア) 実力考査、校外模試の見直しとその充実を図る 学力検査会・判定会、各種研修会（四校連携）の充実を図る	2		実力考査のあり方や目的、活用の仕方について見直し、全職員の共通理解が図られるよう取り組んだ。学力検査会は方法や内容のブラッシュアップが図られた。4校連では初年度の協力体制が構築できた。	
		⑤ その他【リサーチ・シンキング】	(ア) 「進路の手引き」「大学入学共通テストを受験して」「合格体験記」等の効果的な活用をする (イ) 内規にもとづき、推薦入試等の基本方針に対する共通理解を深める	2		「進路の手引き」について生徒配布が大幅に遅れてしまった。しかし、進路決定（受験）に関する有益な情報や資料が提供されたので今後の活用を図りたい。推薦入試は内規に基づき滞りなく進捗した。	
い(2) い自ず心GとSを権育感覚する養	規範意識の向上と生徒支援の充実	① 人権意識と自己肯定感の醸成【シンキング・コミュニケーション・チームワーク】	(ア) 教育相談部の新設などの充実 FITs、人権学習・情報モラル教育の計画的な実施 いじめの未然防止・早期発見（面談、アンケート、SC・SSWの活用） 教育相談部通信・生徒支援部通信による情報発信 職員研修の実施（生徒理解・対応法等の研修）	4	3.6	・いじめアンケートを年3回実施するとともに、SC・SSWとの連携を密にし、いじめの未然防止・早期発見に努めた。 ・FITs（本校独自の新生入オリエンテーション）を通して、安全・安心な学習環境づくりと高校生活の適応を図っている。	3.8
		② 規範意識の育成【マネジメント】	(ア) 日常的なあいさつ・服装・身だしなみの自己管理 問題行動の未然防止・問題行動への迅速かつ組織的対応 交通安全の意識向上（自転車ヘルメット着用の啓発） 集団規律やルール遵守の態度育成	3		・挨拶や服装姿儀をはじめ、交通安全やルール順守の態度育成について、教師相互の連携を密に取りながら常時指導に務めた。自転車通学生と自動車との事故件数は昨年度の12件から4件に減少（1月末時点）。 ・自転車ヘルメット着用推進については、校長はじめ生徒支援部からPTA総会、始業式や全校集会等を通して計画的に啓発を行った。ヘルメットの仕様を定めたことで、購入と着用の推進につなげた。	
		③ 情報の共有化と連携の強化【リサーチ・シンキング・チームワーク】	(ア) 学年会・教育相談部との緊密な情報交換（生徒理解と情報共有） 附属中学校との連携を密にし6年間を見据えた生徒支援を構築する 保護者への迅速かつ丁寧な対応（面談・通信・Classiの充実） 地域及び関係機関との連携	4		・中高合同でいじめ・不登校対策委員会を週1回開催し、情報の共有と早期発見早期対応に努めている。 ・面談週間の設定や学年通信の発行、Classiを利用しての保護者への情報発信等を積極的に行った。	
活(3) 動に自動も治力を活動を推動するたため文武両道の推進	文武運動の推進	① 生徒会総務の育成及び【マネジメント・チームワーク・レジリエンス】	(ア) 生徒会総務及び各種委員会の活性化（自走する集団の育成） 生徒会行事の充実（各種実行委員会の活性化） 自治活動の推進（校則改定、制服改定、ヘルメット着用、防災訓練、感染症予防など）	4	4.0	・生徒会総務および各種委員会が活性化するよう、顧問教師が生徒に伴走し、寄り添う支援を実践した。その成果として、自動販売機の使用時間、私服防寒着やハンディファンの使用マナー・ネクタイ・リボンの導入等について生徒自らが問題意識をもって、組織的見直しや検討をする場面が随所に見られた。自転車ヘルメットは、交通委員会が啓発運動を行い、新規の着用者が激増した。	3.8
		② 部活動の活性化【マネジメント・チームワーク・レジリエンス】	(ア) 心身共に健全な部活動生の育成 計画的な休養日（週あたり平日1日、休日1日、年間100日以上）を設定し 生徒に時間を返す 生徒主体の活動推進のための支援（自走する集団の育成）	4		・各部活動が、年度はじめに部活動年間計画（休養日の設定）を行い、本校HP上に公開している。2学期は、部顧問と部活動生にアンケートを実施し、部活動の活性化と健全化の向上に役立てた。文化部、運動部の両方で九州大会出場実績があり、部活動入部率も各学年とも8割以上を維持している。	
		③ 科学的探究活動の活性化【マネジメント・チームワーク・レジリエンス】	(ア) 地学を含む自然科学部の新設 SSHとの連携 放課後ラボの新設と活用促進	4		これまで以上に自然科学部の活動が活発になり、南九州大学との連携強化や他校との共同研究の推進が図られた。地学部新入部員の中から地学オリンピックに挑戦する生徒が見受けられた。中学生を含めた多くの生徒が、授業での探究活動の延長を放課後ラボを利用して取り組む姿が見られた。	
4) 本校の魅力を開拓し、その発信と広報活動を充実させる	学校デザインの継続的検討	① 教育活動全般企画・調整【カリキュラム・マネジメント】	(ア) SSHを軸とした教育課程の検討・改善 教育目標達成のための行事の精選（テスト含む）と働き方改革 評価のありかたの検証・実施（定期検査から単元テストへの転換研究） 職員研修の企画・運営	4	3.7	新入生より新教育課程で実施中。変更が生徒にとってマイナスにならないよう、授業改善のための議論と実践を充実させた。授業以外は校務のスリム化を図り、職員の負担感を軽減する取組を行った（評価シートデータベース作成等）。次年度に向けた協議・検討も早期に行い、定期検査の一部を単元テストへと置き換え、授業段階の確保等を行う予定としている。	3.4
		② 授業改革の推進【授業改善】	(ア) 探究型授業実践のための授業改革委員会・各教科代表者との連携による情報共有と改善に向けた指針の確認・実施 研究授業・授業相互参観等の企画及び事後会議の実施 全職員による教科横断的・ICT利活用・探究型授業の推進 校内外の授業改革に係る研修会の実施および参加推進	4		各教科科目に委ねられていた「授業」を、理念や方法についての共通理解を学校全体で行い、方向性の共有を行った。「授業改革委員会」を設立し、今後求められる「探究型授業」についての議論を年間を通して実施した。その成果を年3回の研究授業・相互参観期間において共有し、個人レベルの協議も活発化した。校外実施の授業研修会にも例年の2倍以上の教員が参加し、情報を得た。授業改革に関する気運は更に高まっている。教員の自主的な学びの機会が増加した。	
		③ 汎用的能力（ソーシャル・スキル）育成のための活動計画立案・運営・分析【いすみGS】【評価】	(ア) 生徒の伸長を図るために自己評価アンケートの実施・計画・分析 外部テスト（河合塾「学びみらいPASS」）を活用した客観的評価の実施・分析	3		校内実施の「いすみGSアンケート」と、外部テスト「学びみらいPASS」を融合した生徒データベースを活用し、生徒の汎用的スキルの育成を可視化した。担任の面談等による声かけで自己肯定感の増加も期待できる一方、悩みを抱えた生徒の早期発見にも繋がる資料として更に活用の幅を広げたい。	
		④ 「科学技術人材育成校」としての新規プログラムの計画立案・実施・分析【SSH・MSEC関連】	(ア) 科学技術人材育成のためのSSH事業の企画・実施・分析（SRM、SE、SRP、泉のノリコ、コンテスト、講演会等） 先進校視察及び情報提供 中学校とのさらなる連携や理系分野に係る教育活動充実のための計画立案（サイエンス合宿、自然科学部での中高連携） 科学系（自然科学）部活動充実のための支援 M S E C（みやざきSDGs教育ソーシャル）との連携	4		SSHの導入により、物理的側面では理科教を中心環境整備を行うこともできた。実験機器の購入や今後の探究活動に必須となるラズベリーパイの40台購入などは非常に大きい。また、職員の先進校視察派遣、希望生徒による東京大学ボンボリー等の資金援助等、「見えない財産」にも資金を充てることができた。プログラム的には、生徒の「体験」の機会が増えたこと。サイエンス合宿やSRMによる実験の機会拡充等はやはりSSHでなければ実施は不可能。中学校と高校理数科の交流も、附属中間設置以来初めての合同実施など例年にないほど機会が増加し、今後に期待できる。多くの発表会の企画及び参加も、生徒の精神的成长に大きく関わる重要な事項だと捉えている。	
		⑤ 探究活動全般の計画立案・実施・分析【探究活動】	(ア) 地域企業・自治体・他の教育機関との連携・調整 「総研究」「理数探究【基礎】」の企画・運営・分析 校外探究活動の案内及び生徒・職員参加に係る調整	4		都城市役所をはじめ、地域企業との繋がりは例年以上に深まっている。「地域で学ぶ」市政は泉ヶ丘生の使命である。継続したい。普通科でも「理数探究【基礎】」を実施することで、科学的領域の体験活動や、科学的側面からの地域課題解決学年など、例年にない活動が実施できた。	
		⑥ 環境整備	(ア) 図書館の充実と書籍管理・整理 理科実験・準備室等の整備と効果的な利用の検討	3		理数系の書籍を例年以上に購入し充実させ、蔵書検索サービスにより使いやすい図書環境を整備した。	
		⑦ 情報発信（校外向け）【マネジメント・リサーチ・コミュニケーション】	(ア) 魅力開発部と生徒広報委員会の新設 学校案内パンフレット・学校ホームページの充実 高校生によるオープンスクールの企画・運営とその充実 学校公開日の設定と案内 管内中学校・学習塾との連携と各種説明会の充実 メディアの活用（官邸新聞、MRT、JMK）	4		管内中学校での高校説明会担当者を、運営委員を中心に選出して派遣し、オープンスクールの参加者が増加した。説明会担当者のカリキュラムや学校運営に対する理解度が、各中学校説明会でのスマーチな説明に繋がったのではないかと思うか。オープンスクールでは、全ての進行を高校生に任せたことで、生徒の自主性や自走性をPRできた。その結果、推薦入試の全般的な倍率は増加した。しかしながら理数科の倍率は減少してしまったので、今後理数科の探究活動の魅力を学校公開や学習塾説明会を通してさらに発信していく必要がある。	